

# KALS NEWSLETTER 68

2024年1月

九州アメリカ文学会

事務局 福岡大学人文学部 大島由起子研究室内

福岡市城南区七隈8丁目19-1

〒814-0180

## 竹内会長からのメッセージ

竹内 勝徳 (鹿児島大学)

新しい年を迎えて会員の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。元旦より北陸地方の大地震が発生し、続いて、羽田の航空機事故、そして、九州は小倉の鳥町食堂街の火事と、不幸な事故が続きました。会員の皆様にあっては、被害に遭われた方がおられましたら、心よりお見舞い申し上げます。

毎年のように災害が発生し、悲惨な事故が起きない時代は訪れないのではないかと悲観的な気持ちになってしまいます。最近では文学研究でも「人新世」という言葉が使われるようになりました。「・・・世」とは地質年代を表す単位であり、現代は約1万年前から続く「完新世」の地質に分類されています。しかし、二〇世紀半ば以降は人類が産業文明を追い求めることによって、環境破壊や温暖化による気候変動が発生してきたため、その影響を受けた新たな地質年代名が「人新世」と提案され、今も関係の学会で議論が継続しているということです。

地震が「人新世」と関わっているかは分かりませんが、津波や豪雨災害とは密接に関係するでしょう。私たちが「人新世」で生きていかなければならないとすれば、そうした災害と付き合い、そして、その可能性を低下させる行動を起こさないといけないということでしょう。

日系アメリカ人作家のカレン・テイ・ヤマシタは『熱帯雨林の彼方へ』(1994年)において、世界中で廃棄されたプラスチックや発泡スチロールが地下で長期間堆積して化学変化を起こし、マタカンという加工性の高い物質となってアマゾンの地上に隆起してくるプロセスを描きました。アメリカの大企業がマタカンを使って高層ビルやテーマパークを建築し、アマゾン大都市に変容させますが、マタカンは細菌の作用により崩壊していきます。まさに「人新世」の悪夢を凝縮したような物語です。

一方、元来、アメリカ文学には人間と自然の戦いについて書かれた作品が多く見られます。メル

ヴィルが描いたエイハブ船長は白鯨モーヴィ・ディックを執拗に追跡し、ヘミングウェイが描いた老人サンチャゴは巨大なマカジキとの死闘を繰り広げ、スタインベックは砂嵐や洪水に翻弄される人々を描きました。マカジキに対して“I will show him what a man can do and what a man endures”と挑むサンチャゴに対して、『熱帯雨林の彼方へ』のラストシーンでは主人公のカズマサは熱帯性果実を育てる農園に移住し、そこで静かに、幸せに暮らします。この作品の語り手は、カズマサの額に浮遊する小さな球体なのですが、これもまたマタカン製であったため消滅してしまいます。しかし、その記憶はカズマサや読者と共有されるのです。

「人新世」において強大なる自然の力に対して対決を挑むのはもはや不可能と思えます。むしろ、自然災害の脅威を低下させる環境を作りつつ、産業文明からは少しずつ引き下がり、犠牲になった人たちの記憶を未来に繋ぐことをこのテキストは訴えているように思えます。そうやって間テクスト的に読むと、サンチャゴのセリフも私たちに「生き抜け、耐えろ」と言っているように聞こえるのです。

## 『九州アメリカ文学』の編集作業を振り返って

前田 譲治 (北九州市立大学)

今年は年頭から、北陸地方の震災、羽田での航空機事故、小倉の商店街での大火災と、痛ましい災害が連続しました。会員の先生方、あるいは会員の親族の方々に直接的、間接的に被害に遭われた方がおられましたら、謹んでお見舞いを申し上げます。

今回は、『九州アメリカ文学』の編集に関して何か一言をとの依頼を頂き、本稿を執筆しています。思い返しますと、私が最初に『九州アメリカ文学』に論文を投稿したのが院生だった1990年で、初の学会誌への論文投稿ということで、大変な緊張感と共に電動タイプライターを操作していたこと、鮮明に記憶しています。それから時は流れ、編集委員を1997年から、編集委員長を2012年からお引き受けし、編集にはすでに30年近く関与させて頂いています。そこで、この機会に編集の在り方の変遷について、申し述べたいと思います。

編集作業は、投稿規定に即して行われますが、私が編集に携わった間に、2度、抜本的な改定がなされています。(ただし小規模な一部改定は数多くなされています。)まず、2009年までは英文の投稿規定でしたが、投稿者名の記載箇所に関する規定がないため、投稿論文に投稿者名が明記された状態での論文審査がなされていました。2010年からは規定が日本語となり、投稿論文に投稿者名を記入しない旨、新たに明記され、ここから匿名審査が始まりました。その後、2021年に発効した現規定では、匿名審査がより厳格化され、また、審査によって投稿論文の採否が決定される旨が初めて明記されています。従前は、明確な論拠がない中、暗黙の了解のもと、投稿論文の審査と採否決定が行われており、この在り方に関しては、会員の先生方の中に様々なご意見があることを漏れ

聞いていました。2021年の改定は、このような長らく続いた在り方を解消する、画期的なものであったといえます。さらに論文の提出も、発刊以来続いていた紙媒体から、メールによるデータ提出に変更となりました。この改定により、編集作業は格段に迅速化し、編集委員の査読、投稿者の改訂作業、校正作業等々、編集のすべての局面において、より多くの時間を確保できるようになりました。この改訂は、誤植や誤記が残存する可能性を全体的に低減させ、本誌の質を高めることに大きく寄与するものといえます。

また、現在は奥付のページに記載されている編集後記ですが、2002年までは記載がなく、2003年が初出となります。これは、編集部の判断によるものではなく、当時の会長からのご発案によるものです。編集後記を掲載することによって、従前は一般公開されていなかった、投稿状況や投稿論文に関する審議プロセスを会員全体で共有することが可能となりました。

以上の通り、『九州アメリカ文学』の編集体制は、時と共に進化、発展しています。私自身は、長らく編集作業に従事しながら、有意義な発案を行うことがなく、忸怩たる思いがあると同時に、編集体制の発展に寄与する作業や発案を行って下さった先生方に改めて深く感謝しています。会員の先生方からも、編集体制に関するご提言等があれば、是非お聞かせを頂き、より充実した編集体制を目指すことができると考えております。

## 地区だより

### 《沖繩地区》

加瀬 保子 (琉球大学)

琉球大学の加瀬保子です。沖繩地区の最近の活動をご報告いたします。2023年度9月, Ohio Northern University の Jonathan Pitts 先生がフルブライト客員教員として琉球大学にいらっしゃいました。Pitts 先生は, アメリカ文学の他 Creative Writing もご専門で, Ohio Northern University でも Creative Writing のプログラムの設立と発展に貢献してこられました。琉球大学では, 今学期アメリカ文学などの学部クラスを複数担当して下さっておりますが, 12月に教員向けのセミナーを開催され, creative writing の教授法や life work として書き続けてこられた travel writing について紹介して下さいました。Pitts 先生は2月初めまで琉球大学に滞在して下さる予定です。

また2023年10月には, 沖繩系カナダ人作家の Darcy Tamayose さんご家族が琉球大学に滞在されました。Tamayose さんは, 最近出版された *Ezra's Ghost* をはじめ, 沖繩とカナダを舞台にした *Odori*, 若者をターゲットにした *Katie Be Quiet* を出版され, 数々の賞を受賞されてきました。今回の沖繩滞在は, Tamayose さんの大学院でのご研究と次の作品執筆に集中するのが主な目的でしたが, ご多用な中, 学生や教員のために, “Southern Alberta Okinawan Diaspora (1907-present): The Kika Nisei Journey of Naoko Shimabukuro” というタイトルでご講演もして下さいました。喜納育江先生の司会のもと, ご自分のお母様をはじめご家族のカナダにおける経験を語って下さり, 参加した学部生は積極的に Tamayose さんに質問を投げかけておりました。沖繩からカナダへ移住した Okinawan Diaspora の歴史を学ぶ貴重な機会だったと思います。

加瀬は, Tamayose さんの *Odori* について年明け1月に Philadelphia で開催の Modern Language Association の年次大会で発表することになっておりましたので, Tamayose さんにインタビューさせていただきました。Tamayose さんのご協力のおかげで, 作品の理解が深まり, MLA での発表も無事終わることができました。ここ3年間コロナ禍のため ZOOM を使って MLA で発表しておりましたが, 久々に現地で対面での発表が叶い嬉しく思っております。友人, 知人, 恩師などのセッションにも参加し, 自分の研究分野の新たな動向を学び, 大いにインスピレーションを得ることができました。また多くの大学出版社が揃う book exhibition にも足を運び, 多くの有益な情報を得ることができました。

## 《鹿児島地区》

千代田 夏夫 (鹿児島大学)

新春のご挨拶を申し上げます。鹿児島地区からのご報告です。森孝晴先生（鹿児島国際大学）からは以下のお便りを頂戴いたしました。歴史的資料発見についてのご報告も併せて、ロンドン研究の華、薩摩の地に今盛りなりの思いを新たにいたします。

.....

コロナや会長の私の病気もあり、日本ジャック・ロンドン協会の活動は以前のように順調に進んでいませんが、ようやく今月、会誌であるニューズレター『呼び声』54号と研究誌『ジャック・ロンドン研究』第9号が同時に発行できる運びになりました。『研究』には査読済み論文3本と研究ノート2本を掲載することができました。また、しばらく閉鎖中であった協会のホームページも再開されました。一歩ずつまた歩んでいきます。昨年の後半を中心にアメリカの研究者との共同研究も進んでいます。実は、ジャック・ロンドンの日本人使用人である中田由松の日記が大量にアメリカで発見されたのです。詳しいことは協会の研究誌『ジャック・ロンドン研究』第9号に紹介されていますが、中田の資料は少ない上にロンドンとの関係も最も深いひとなので、新情報が期待されます。最後に、昨年自費出版の形ですが、教え子の戸川聖也氏との共訳で『ジャック・ロンドンの日露戦争従軍記（上）』を出しました。続く（下）の出版に向かって引き続き頑張ります。

.....

また、来場された先生方も多かったことと存じますが、小林朋子先生（鹿児島県立短期大学）は昨春2023年5月13日、14日に鹿児島大学で開催された九州アメリカ文学会第68回大会にて「アフクト経済のネットワークを創出する—『タール・ベイビー』におけるホームとしての身体—」と題して研究発表を行われました。ご高説が鮮やかに甦ります。（鹿児島大学 千代田夏夫）

## 《熊本地区》

楠元 実子 (熊本高専)

9月にアメリカを訪れる機会があり、変化に驚きました。4年ぶりの訪問でしたが、物価が高騰しており、サンフランシスコでは1泊3万円以下のホテルがほとんどなく、水や食事も高額で日本の倍以上かかると感じました。

また、薬物の蔓延で街の様子が大きく変わっており、フェンタニル中毒者がゾンビのように立ち尽くしている光景が至る所で見受けられました。道端にはスーパーからの盗品とおぼしきものを売る人々があり、カリフォルニア州では950ドル未満の窃盗は重罪に問われないため万引きが横行し、それが売られているとのことでした。

テキサスの田舎町でもホームレスが増加し、車が行きかう道路の植え込みで寝ている妊婦さんな

ども目にしました。在米の友人たちはこの光景に慣れてしまっているようで、私にはそれもショックな経験でした。情報として知っていたつもりでしたが、実際に見て感じることの重要性を再認識しました。

さて、前回報告した後の熊本での研究会の活動をお知らせいたします。

○第164回（2023年9月23日）Zoom/熊本大学にて

題目：Andersonの*Winesburg, Ohio*について—Dreiserに翻案された“Tandy”を中心に

発表者：田口 誠一

司会者：楠元 実子

\*Andersonの“Tandy”とDreiserの“The Beautiful”についてご発表いただきました。田口先生の見事な解説でアンダーソンとドライサーの交流、作品の比較や説明が行われ、理想化された超越した存在を描いたアンダーソンと現実的な存在する女性の美しさを歌ったドライサーという2名の作家の特徴の違いが際立ちました。ジェンダーを超えた存在である女性“Tandy”の意味、名づけの役割、当時の時代背景などについてのディスカッションが活発に行われ、不思議な作品への理解が深まりました。

○第165回（2023年12月2日）Zoom/熊本大学にて

題目：Wakako Yamauchiの“And the Soul Shall Dance”の母と娘

発表者：楠元 実子

司会者：池田 志郎

\*Wakako Yamauchiの短編“And the Soul Shall Dance”について、戯曲版との違いに触れながら、2組の母娘のそれぞれの閉塞状況を読み取り、2名の母たちが疑似的に入れ替わり、両方の母たちから娘たちが学んだことによって、2世の娘の視野の広がりやレジリエンスにつながったという内容でした。また、女性の力強さが継承される戯曲版との比較や、アメリカの日本人街や全米日系博物館の報告もありました。フロアからは当時の男女の役割、1世2世の差、視点によって変わる解釈、白人が出てこない戯曲をアメリカで演じる意味など、様々な質問やコメントが行き交いました。戯曲版をこれから視聴するという声もありました。

忘年会開催は万全を期して？次の2024年ということになりました。次回の研究会（内容未定）は2月17日頃に開催予定です。ご関心のある方は、メールで楠元までご連絡ください。

## 《北九州地区》

齊藤 園子（北九州市立大学）

北九州地区からは、まず北九州アメリカ文学研究会のご報告です。今回も薬師寺元子先生より直接次のお便りを頂戴いたしました。

北九州アメリカ文学研究会の活動について2件ご報告いたします。

**(1) 第19回研究発表会実施**

日時：2023年9月16日(土) 14:00~17:00

会場：北九州市立大学 北方キャンパス 本館 D-202

**[研究発表1]**

論題：聖ヨハネ騎士団の表象—小説『マルタの鷹』から

読み解くヨーロッパへの憧憬

発表者：田中有紀 (東亜大学非常勤講師)

司会者：穴井孝好 (アメリカ文学研究者)

**[研究発表2]**

論題：『緋文字』のリメイク版『小悪魔はなぜモテる?!』の

宗教・ジェンダー的視点分析

発表者：村田希巳子 (北九州市立大学非常勤講師)

司会者：乗口眞一郎 (北九州市立大学名誉教授)

研究発表1では、ハメットがどのような効果を狙ってタイトルを「マルタの鷹」としたのか、小説中の「マルタ」「騎士団」「聖ヨハネ」「鷹」に関する文章を取り出し、米国人が持つ「マルタの鷹」の象徴についてのご発表でした。田中有紀先生は、マルタ島の研究者なので、現代のマルタ島の現状を織り交ぜながら、大変興味深く論じて下さいました。

研究発表2では、キリスト教を妄信する学生グループ、SNSに翻弄される学生たちを描いた映画と、原作『緋文字』とを比較しながら、映画に表象されているジェンダー問題や宗教問題、またLGBTQの差別問題について、村田希巳子先生が、解りやすく情熱的に検証して下さいました。

**(2) 第11回特別講演会実施**

日時：2023年11月25日(土) 14:00~17:00

会場：北九州市国際会議場 33番会議室

講演者：西谷 拓哉 (神戸大学大学院教授)

演題：「ヘミングウェイを映像的に読む」

司会者：村田 希巳子 (北九州市立大学非常勤講師)

ヘミングウェイの作品、『武器よさらば』、『誰がために鐘は鳴る』、『老人と海』、『殺し屋』の原文と映画を比較しながら、「ヘミングウェイを映像的に読む」とはどういう意味かを、丁寧にかつ緻密に、解りやすくお話し下さいました。「映像的に読むとはどういうことか」に始まり、「ヘミングウェイと映画」、「映画的小説とは何か」、「映像的な文章」、「ヘミングウェイの作品の間について」等とても詳細で、具体的なお説明により、映像的に読むことが、結局、小説の精読になり、その意味で映像化という行為は、小説の精読に大きく寄与することになるということ、原文を朗読しながら、かみ砕くようにご説明下さいました。はじめて触れる知識や概念が多く、学びの多い120分ありがとうございました。西谷先生から拝聴致しました様々なアイデアを、今後の原書講読や、映画鑑賞に生かしていきたいと存じます。

2024年1月10日 薬師寺 元子

そのほかですが、九州アメリカ文学会 12 月例会が九州大学箱崎サテライトキャンパスで行われた際に、当日のプログラムのうち 2 つが、北九州地区の渡邊真理香先生（北九州市立大学）と齊藤が司会を担当するものでした。渡邊先生が担当されたのは牧野理英先生をお迎えしての特別講演です。牧野先生のご著書『抵抗と日系文学——日系収容と日本の敗北をめぐる』(三修社) の第 8 回日本アメリカ文学賞受賞を記念してのご講演で、大変活発な意見交換が行われました。

齊藤の方では、12 月 1・2 日に済州大学校（韓国）で開催された国際学会（Korean Comparative Literature Association (KCLA) International Conference of Comparative Literature）に齊藤ゼミにて参加しました。オンライン参加と現地参加の両方が可能な形で開催され、学生はそれぞれ希望の方法で参加しました。発表内容は、北九州市立大学学長選考型研究費によるプロジェクト「国際的な取組みへのコミットメントを通じた本学におけるジェンダー平等 (SDG5) の推進」の取り組みや卒業研究の報告です。済州大学校の教授や学部生がディスカッサントとして参加していただき、意見交換の時間が持たれました。ご協力くださった KCLA や済州大学校の関係者にこの場を借りてお礼申し上げます。参加学生にとっては、研究をさらに深める契機となる貴重な機会になりました。また、Kate Chopin の短編 “The Story of an Hour” の齊藤ゼミによる共訳を『北九州市立大学外国語学部紀要』第 157 号（2023 年 12 月発行）に掲載させていただきました。ご高覧いただけますと幸いです。今年度 7 月、北九州市立男女共同参画センター・ムーブ主催のムーブフェスタに出展したイベント「若者と描こう！ジェンダー平等の未来予想図∞」でご紹介した日本語訳を改訂したものです。

## 九州アメリカ文学賞について

九州アメリカ文学賞（新人賞）への応募をお待ちしています。電子メールによる応募のみの受付です。以下の宛先まで原稿をお送りいただきますようお願いいたします。

締切：2024 年 2 月 20 日

提出先：秋好礼子（福岡大学） reikoa@fukuoka u.ac.jp

応募の際は件名欄に、“Manuscript Submission for the Kyushu American Literature Prize”と明記して下さい。応募の詳細に関しましては、以下のリンクをご覧ください。

<http://www.kyushu-als.org/news/article/47>

## Greg Barnhisel 先生講演会とワークショップの開催について

【Greg Barnhisel 先生講演会】

日時：2024 年 3 月 9 日（土）午後

場所：北九州市立文学館



### 【Greg Barnhisel 先生ワークショップ】

日時：2024年3月10日（日）午後

場所：北九州市立大学

Barnhisel 先生は冷戦期文学に詳しく、Cold War Modernists: Art, Literature, and American Cultural Diplomacy (Columbia University Press, 2015)などの著書があります。Norman Pearson に関する伝記を出版する予定もあるそうです。詳しくは以下の URL をご覧ください。

<https://www.duq.edu/faculty-and-staff/greg-barnhisel.php>

なお、ワークショップには、九州アメリカ文学会の会員も登壇予定です。講演会、ワークショップとも、皆様のご参加をお待ちしております。

### 九州アメリカ文学会第 69 回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第 69 回大会は、以下のとおり開催いたします。

日時：2024年5月18日（土）、19日（日）

会場：九州大学伊都キャンパス・イーストゾーン

特別講演：渡邊克昭先生（大阪大学）

シンポジウム：「アメリカとテクノロジー——1930年代流線型時代の「人間」、「他者」、「テクノロジー」とその未来（仮題）」司会 中村嘉雄先生（九州大学）

下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。

締切：2024年2月末日

提出先：高野泰志（九州大学）[takano@lit.kyushu-u.ac.jp](mailto:takano@lit.kyushu-u.ac.jp)

レジュメの様式：日本文の場合 500-800 字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。英文の場合は 300 語程度。作家名と書名は原則として原語綴りに統一。

### 日本アメリカ文学会第 63 回全国大会発表者募集

日本アメリカ文学会の第 63 回全国大会（2024年10月12日（土）、13日（日）開催予定、於：愛知大学）にて研究発表を希望される方は、以下の要領でレジュメを提出ください。

1. 締切：毎年3月31日（九州支部事務局必着）。

2. 提出先：九州支部事務局 oshima-y@fukuoka-u.ac.jp

3. A4横書きのレジュメ（和文の場合1200字程度、英文の場合400 words程度）と略歴を、次の方法で支部事務局に提出すること。なお、発表タイトルと氏名は英訳したものを併記し、作家名と書名は原則として原語綴りに統一すること。

4. 略歴は次の項目を記載してください。

- ・氏名
- ・住所（郵便番号をつける）
- ・e-mail address および電話番号
- ・最終学歴
- ・現在の所属（非常勤講師は（非）、院生は（院）とつける）
- ・研究業績（過去3年間の口頭発表、掲載論文は、タイトル、発表年月日、掲載誌を記すこと）

5. 全国大会開催支部以外の支部に所属している現役大学院生ないし申請時に大学院修了または退学後3年以内で常勤職を持たない会員で大会において研究発表を行う者に対して、本部より一人一律2万円の旅費を補助いたします（「本部会費」を納入している支部が「所属支部」となります）。申し込みについては支部を通じて手続きや連絡を行うことになります。上記4の略歴によって申請条件を判断しますので、最終学歴と現在の所属を明確に記載するようにしてください。

6. その他：Wordで作成したレジュメと略歴のファイル（.docまたは.docx）をメールに添付し、支部事務局へ送信する。レジュメのファイル名は、「全国大会 レジュメ自身のフルネーム」、発表者略歴のファイル名は、「全国大会略歴 自身のフルネーム」とする。カギ括弧を必ず付ける。

## 編集後記

大変お待たせいたしました。NEWS LETTER 第68号をお届けします。原稿をお寄せくださいました皆様には、心からお礼を申し上げます。

2024年年初は、元旦に能登半島地震、2日に羽田空港での旅客機と海上保安庁飛行機との衝突事故、3日には田中角栄元首相の邸宅と烏町食堂街が火災に見舞われるという悲しいニュースの連続した。自分がのうのと過ごしていることに、疑問と不安を抱きましたが、文学作品を読むことで、心をいったん落ち着けて、自らがすべきことに思いを至らすことができました。文学は人を救う力を持っている・・・間違いないことと思います。アメリカ文学研究を通して、文学の持つ底力の意味を、広めてまいりましょう！本年もどうぞよろしく願いいたします。

NEWSLETTER 担当 江頭 理江（福岡教育大学）